

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

## \*ローマで双子育児③\*

浅田 朋子

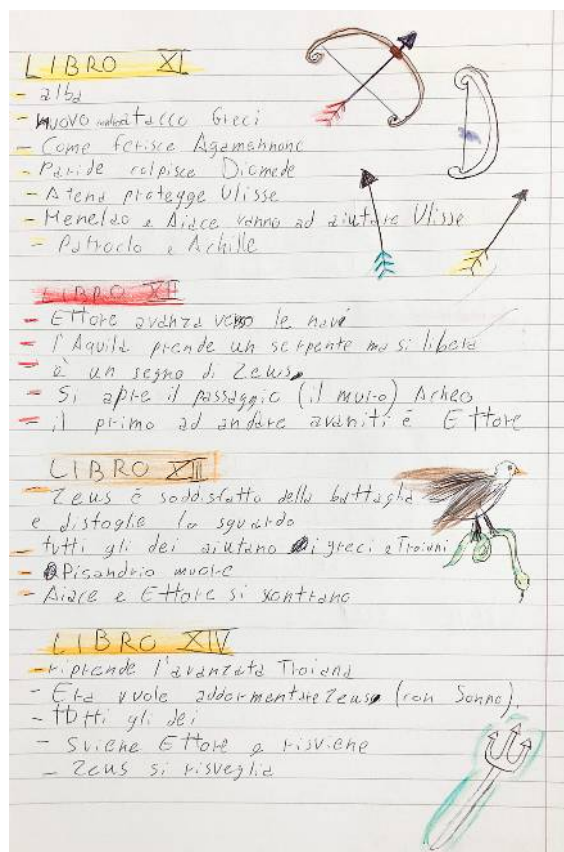
去年の9月から公立中学校 La scuola secondaria di primo grado(前期中等学校)に通い始めた双子の娘たち。早いもので7ヶ月が過ぎた。

双子が通うローマ市内の公立中学校の授業時間は8時から14時までで、お昼ご飯を食べずに帰宅する。お昼の時間が遅くなるので、生徒たちは当然お腹が減る。生徒は家から間食用の食べ物を持ってきて、休み時間中に食べるのである。だいたいみんな panino(パンにハムなどを挟んだもの)、tramezzino(サンドイッチ)、ピッツァなどを持って来るようだ。ピッツァはマルゲリータなどではなく「pizza bianca(白いピザ)」に生ハムなどを挟んだものを持って来る子が多いようである。

授業科目は、Italiano(国語)、Storia(歴史)、Geografia(地理)、Matematica(数学)、Scienze(理科)、Tecnologia(技術)、Inglese(英語)、第二外国語・Francese(フランス語)・Spagnolo(スペイン語)、arte e immagine(美術)、Musica(音楽)、Scienze motoria e sportive(体育)、religione cattolica(宗教/選択制)、そして学校ごとにさらに掘り下げて学習する選択教科 Approfondimento di discipline a scelta delle scuole(学校選択科目の発展学習)として、この学校では Letteratura antica(古典文学)が追加される。

「先生」の呼び名は、小学校の maestro / maestra から professore / professoressa と言うようになった。プロフェッソーレって呼びにくいし、なんかたいそうやあとってしまうが…。日常では

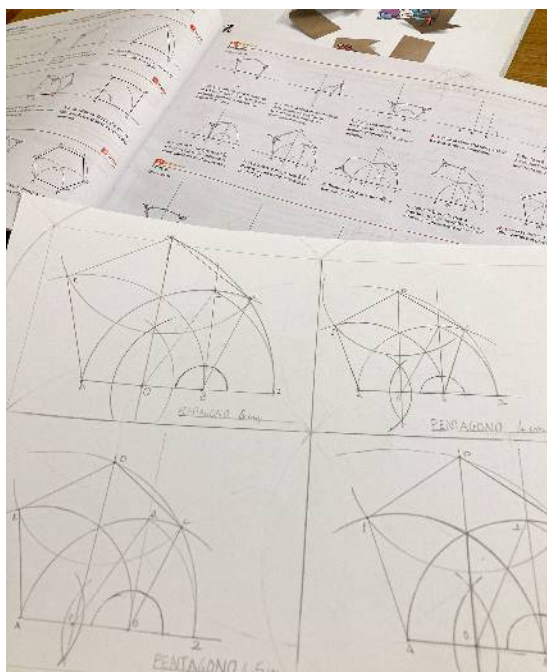
prof/プロフと訳されることも多いが、先生の前以外では、子供も大人もだいたい敬称をつけずに先生の苗字を呼び捨てにしている。



【lettera-antica・神話のノート】

双子は「第二外国語」に「フランス語」を選んだ。小学校から英語授業が始まってはいたが、やはり本格的に勉強し始めるのは中学からとなり、そこに第二外国語も勉強しないといけないので、けっこう大変なのである。夫の時代(夫・52歳)では、第二外国語は高校からだったらしい。

また、中学から加わった新教科として Tecnologia (テクノロジー/技術)がある。材料、エネルギー資源、製図や情報技術について学ぶ。教科書は2冊に分かれていて、一冊は材料、エネルギー資源についての教科書、もう一冊は幾何学模様が書かれたデザイン・製図の教科書となる。この製図がかなり本格的でこのような科目を普通科の中学ですることにとても驚いた。コンパスや定規などの製図用具を使い、複雑な幾何学模様を製図するのである。さすが建築・設計の国だなあ〜と感心した。製図セットを用具バックに一式入れて学校に持っていく姿は建築科の学生のようにある。



【テクノロジーの製図の教科書と課題】

そして、中学に入る前から周りの友人たちに聞いていたことだが、本当に山のような宿題が毎日出されるのである。もちろん学校によって違いはあるが、帰宅後の時間は全て家庭学習に充てるような量が出されるのである。特に双子の学校は

宿題が多く、帰宅後すぐに昼食をとり、19時ごろまで勉強している。しかも学校で習ってはいるが、中学に入りたての一年生は、その量からどこから手をつけていいかわらず、途方に暮れるのである…。さらに教科書に書かれる文も難しくなり理解しづらいのである。小学校から中学の教科書の内容のレベルが急に上がるのだ。

宿題はもちろん先生から聞いてくるが、保護者が全員登録しなければならない学校連絡アプリを通して、保護者にも宿題内容が各教科の先生から送られてくる。私も夫も登録してアプリを使っているのだが、この宿題の通知音がひっきりなしに鳴るので、私は「ええい、うるさいわ！！」と「通知をミュート」を「常時」にした。それくらい宿題が多いのである。

小学校ではどうにか私も各教科の手助けはできたが、ここまでくると母語ではないイタリア語で宿題を見るのはかなり難しく時間もかかる。それに加え努力するのがかなり面倒くさくなってきたので、夫に「日本語だったら教えられるんやけどなああ…」とため息をつき、残念がる雰囲気醸し出し、困った時の「イタリア語が母語ではないゆえ、色々と苦勞しているかわいそうな日本人切り札カード」をサッと出した。夫は私のイタリア在住が長くなってきた今も、日本を離れイタリアで暮らす私を常に気遣ってくれる。本当にいい人なのである。本当は日常生活で言語のストレスを感じなくなってきたのだが、つつい夫の良心に甘えてしまう。私に自信をつけさせるため、ことある度に「今の説明は本当にうまくできていた」「対等に喋っていてすごいね」と褒めてくれるので、自分がイタリア語上級者のような勘違いをさせるのが少々問題だが、この理解と気遣いには本当に感謝している。

そしていつものように「もちろん、日本語だと僕より上手く教えられるよね、残念だよね。わかるよ…。」と躊躇なくサッと切り札カードを受け取り「宿題管理と指導」を夫は全面的に引き受けることとなった。

毎日学校から帰ってくると、双子は仕事上の夫に電話をして、宿題の確認と進め方の打ち合わせをする。わからないことがあれば夫に電話をして聞く。夫は帰宅後の19時からすぐに宿題の出

来具合をチェックするが、できてない部分が多いので、ここから20時くらいまでまた双子は夫と一緒に勉強をするのである。「大変やなあ・・」と大好きな「トリュフポテトチップ」をポリポリ食べ横目で見ていたら、夫から「双子の英語とフランス語の宿題を確認して」と指示がきた。「え？・・」とポテチを落としそうになると「英語の成績よかったって自慢してたよね、フランス映画大好きだよ」と言われた。いや、確かに英語は得意だったよ、でも今はほとんど使わないから忘れてるし、フランス映画が好きだったのは若い時で・・「僕にとっても英語とフランス語は外国語だから、同じだよ。」と今まで叩きつけられたことのないカードをバシッと叩きつけられた。しかしここで怯んでは、私もこのおぞましいイタリアの「子供の宿題に振り回される親の渦」に巻き込まれてしまう。「確かに・・でも・・フランスはヨーロッパだし！」と苦し紛れに地理的なカテゴリーで逃げようとしたが、「じゃあ、アジアってだけで韓国語教えられるの？あ、あと僕はフランスに興味はないから」と断られた。どうもイタリア人はフランス人に対して芸術・食文化的に「ライバル視」しているところがある様に思う。とにかく、同じ「外国語」という立場になったのでもう私のカードは使えなくなったのだ。さらに、どちらかという私の方が得意な分野とも言えるので、仕方なく「英語・フランス語担当」になった。

英語は過去に学習しているからまあいいとしても、せっかくだイタリア語を習得し問題なく快適に過ごしていたのに「フランス語」をまた勉強しないといけないという厄介さ・・。若かりし頃のシャルロット・ゲンズブールのアンニュイな表情が頭に浮かび「はあ・・」とため息をついた。

「あ～あ～、なんでママだけ3ヶ国語！？」という双子が「ママ、私たち土曜日に日本語学校で日本語も勉強してる」と小さいが重いカードを渡された。うん、そうだよ、おっしやる通り。君たち、日本語も勉強してるよね。今の双子は「書くこと」特に「漢字」が苦手なものの、会話は全く問題ない。小さい時は一時「もう日本語で会話するのは無理かも」と諦めかけた時があったが、よくここまで日本語を習得してくれたと感慨深い。

イタリアの中学の宿題の量に最初こそ翻弄されたものの、双子もだんだん慣れコツを掴み以前より自分たちでできる範囲が多くなってきたが、まだまだ夫の助けは必要である。

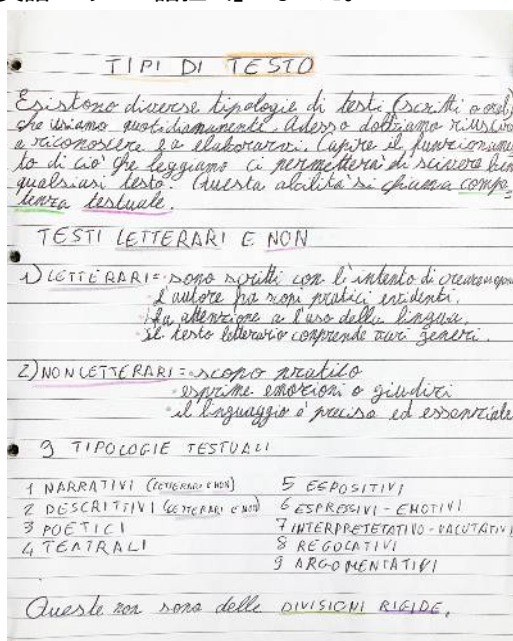
私の「もうイタリア語喋りたくない」という愚痴を聞き、高い日本米を妻と娘たちのために買いに行き「パパは、パンでいいよね」(夫は日本米が好き。)と言われ、なかなか動詞の活用が覚えられない娘にイライラし怒ると、私に「イタリア人は声が大きすぎるねん！！」と怒鳴られる。ちなみに日本に帰国して実家に戻った際、母に「あんた、ほんまに声大きいなあ・・」と言われた。

そんな自分のことを棚に上げまくる妻に対し、その棚をそっと見ないでいてくれる夫。

外国に住むと、日本では味わうことのない理不尽な出来事、悔しさや悲しさを感じることがあり、そういう時は自分を正当化しないとやってられない。

イタリア・日本の両方の文化と言語を持つ娘たちには、勉強だけでなく、そんな夫からたくさんのお話を学んで欲しいと思う。

(元当館語学受講生)



【イタリア語文法のノート】

## \* まだ寝ないなら スコーンを焼かない? \*

竹田 理乃

退職と転職のどさくさで、かつてお世話になったポーニャの語学学校クルトゥーラ・イタリアーナに里帰り超短期留学をさせていただいて以来、最初の留学のことが懐かしく思い出されます。

留学準備中、最も気がかりだったのは日々の生活のことでした。授業に困っても学校の先生に相談できますし、愛用の教科書だって持っていきます。そちらはあまり気にしていませんでした。一方、万年実家暮らしで生活力のない青二才がいきなりの海外生活、しかもキッチンやバスルームをことばが通じない可能性もある見ず知らずのルームメイトとシェアして上手くやっていくなんで、気を付けるべきポイントすら見当がつかず、せめて大学生のうちに下宿生活を経験しておかなかったことを悔やんだものです。

クルトゥーラ・イタリアーナが学生に用意してくれる滞在先は、まず学生が共同生活を送るシェアアパート、それからイタリア人のホストと暮らすホームステイ、あとはホテルも紹介してもらえと聞いています。このあいだの超短期留学時にはイタリア人のおばあちゃんがネコと暮らす家の部屋を借りたのでホームステイではありませんでしたが、ポーニャ大学に通う留学生もいたので雰囲気としてはシェアアパートとさほど変わりませんでした。

では、そのシェアアパートとはどういうものなのかというと、十人十色の人間が関わることなので、あまり単純化してしまうのはよくない気がします。大学に通う学生たちの部屋も含めて、遊びに行かせてもらった友だちの下宿にはそれぞれの雰囲気がありましたし、私が暮らしていた下宿も住人が入れ替わればいろいろと変わりました。飲料水や消耗品をシェアしているところもあれば、そうで

ないこともあり、ハウスルールはそれぞれなので、わからないことは大家さんやシェアメイトに確認する必要があります。

なんだか「こればかりは説明できないよ」と突き放してしまったようで恐れ入りますが、この生活のすり合わせ作業も留学のいいところだったので、ぜひ腕まくりして取り組んでいただきたい。



【ポーニャの風景①】

私が長期留学中に暮らしたシェアアパートは、大家さんの都合でもうありません。共用のキッチンと湯舟なしのバスルーム、居間に加えて、ベッドルームが大小合わせて3つの物件でした。大きいベッドルームは2人で使うこともできたので、最大4人が共同生活を送ることになります。私が入居した時期には、大きいベッドルームは親友同士でヴァカンス留学中のスウェーデン人の女の子たちが使っていました。

このスウェーデン人たちがいろんな意味でもおもしろかった。明るく愉快で、北欧式のミートボールを作ってくれたり、積極的に(英語で)コミュニケーションを取ってくれたり、一緒にいてすごく楽しいものの生活力は私以下。しょっちゅう「お皿はすぐに洗ってよ、シンクが使えないと困るよ」「北欧には皿を食べてすぐに洗う習慣がないの。寒いからものが腐らないし、虫も湧かないし」「ここはイタリアです」というような応酬になり、いちおう(何度目かの)勝利を収めた私が(英語とイタリア語で)明文化したハウスルールを冷蔵庫に掲示し、見回りに来た大家さんが日本人の手書きの几帳面さに感心して「これは教科書をコピーしたわけじゃないよね?」と確認を入れるという一幕がありました。

ちなみに大家さんはイタリアでよく見かける、すべてのアルファベットを丸っこい大文字で書くタイプでした。

一緒にいた期間は長くありませんでしたが、今はそれぞれに家庭を持っているこの元ルームメイトたちが立派にママをやっている姿をFacebookで見かけると、共同生活の場を快適に保つ習慣づけの練習台として図らずも役に立った我が身の苦勞と忍耐が誇らしく、また懐かしくもなります。

ちなみに、私の部屋の直前の住人は、気に入らないところがあって入居後すぐに出て行ったのだそうです。実は私も同じで、最初の最初に紹介されたシェアアパートにはどうしても合わないところがあり、学校の事務室へ相談して引っ越しをさせてもらいました。私と彼女が部屋を交換したかたちになります。

偶然で知り合った彼女と話していて、このことが発覚したとき、すごく洪い顔で「よく我慢できてるね」と言われました。お互いさます。妹尾河童が『河童の覗いたヨーロッパ』のローマにあるホテルを紹介するくだりで、但し、僕にとって気ごころの知れたこの宿も、他の人にとっては、どうであるかは疑わしい」と書いているとおり、人にも部屋にも巡り合わせや相性というものがあるのでしょう。

それにしても、これからお世話になっていこうという早々の時期に、まだ柔らかい表現なんて使えない稚拙なイタリア語でクレームをつけて、いきなり学校の人に嫌われてしまったらどうしようと、相談前夜はよく眠れませんでした。私がメソメソした顔でやって来たものだから、きっとヤバいことが起きたに違いないと誤解して心臓がバクバクしたと、当時の事務員さんが後で笑って教えてくれました。この元事務員さん曰く、日本人はだいたいみんな礼儀正しくて温厚でかわいけれど、ぐっと我慢して笑顔で Sì, sì と頷きながら急に涙をこぼす人がたまに現れるところだけは怖かったそうです。あなたは早めに相談してくれてよかったと褒めてもらいましたが、私も相談に乗ってもらえたことにホッとして事務室を出たところでちょっと涙ぐんでいたことは秘密です。



【ボローニャの風景②】

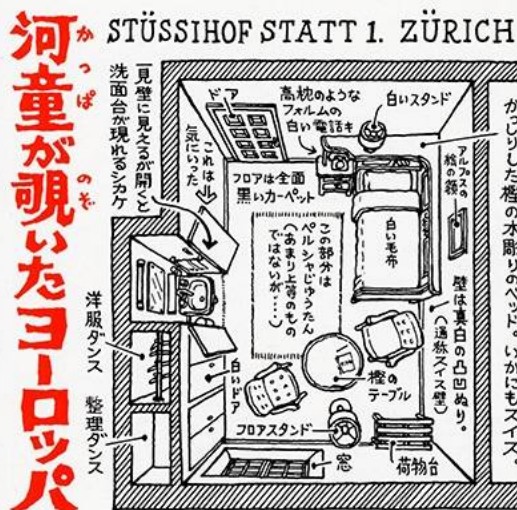
たった1週間の超短期留学もできる語学学校のシェアアパートなので、長居しているとルームメイトを迎えたり見送ったりすることになります。到着したばかりで不安がる韓国人の女の子と手を繋いで通学路の予習に付き添ってあげたり、地震に驚いて飛び出してきたフランス人を抱きとめて靴を履かせたり、ホームシックのスペイン人が私の部屋に居座って出ていけなくなったり、私がよそ行きの服の一着も持ってないことを察した日本人のおねえさんに買い物へ連れ出してもらったり、習慣やマナーを巡って喧嘩することもありましたが、生活やイタリア語の工夫を凝らして、それぞれに得意と苦手のあるルームメイトたちと暮らすの場を共有するのはおもしろい経験でした。

いろいろあったなかで特に恋しいのは、イタリア系スウェーデン人のダニーとの生活です。私たちは同い年で、同じくらいの背丈で、素行がよくて、料理はいちおうできるくらいで、廊下の隅に埃がたまればモップをかけたくなるくらいの衛生観念を持っていて、お互いの部屋を訪ね合うことはないけれど、それまではあまり使われていなかった居間でなんとなく一緒にテレビを見て過ごすくらい

には親しい、ちょうどいいルームメイトでした。おばあちゃんから耳で覚えたのがスタート地点だったダニーは、イタリア語は聞いてわかるけど口からは上手く出ず、私といえば海外ドラマで聞き慣れているわりに英語を話せなかったため、彼女は英語で、私はイタリア語で、とりとめのないことをたくさん喋りました。

穏やかだった私とダニーの暮らしに、些かなりともドラマチックなエピソードがあるとすればひとつだけです。ある夜、いつもならば自室で静かに過ごしているダニーが、控えめながらもはっきりと「起きてる？」と声をかけて私の部屋のドアをノックしてきたものだから、なにかあったのかと驚いて、ごろごろしていたベッドから飛び起きました。ダニーは照れたみたいに笑ってから、真っ白に蛍光灯が輝いているキッチンへ手招きして「まだ寝ないならスコーンを焼かない？」と誘ってくれました。なんでやねんと思わないでもなかったものの、なんだかとても嬉しくなって眼が冴えてしまって、たぶんこんな感じだったとレシピも見ないで粉を混ぜて、使い方のわからない古いオープンにライターで火をつけて、遅くまでかけて焼き上げた厚みの乏しいスコーンを熱いうちに食べて「できたね」と頷き合っ。彼女が誘ってくれたおかげで、不思議な充足感のある時間を過ごすことができました。

イタリア留学というと、大声の飛び交う活気に満ちた教室に溶け込んだり、荘厳な教会や美術館を巡ったり、伝統と革新のつり合いに揺れる衣食住のプロフェッショナルの知恵と技を学んだり、志高い挑戦者が声楽やサッカーの道を邁進していたりといったイメージがありますが、柔らかくて小さな「おばあちゃんの故郷のことばで話したい」くらいの夢を抱く友だちと、真夜中のキッチンで小麦粉を散らかして眠い目をこすりながらテーブルを拭くような側面を愛するの悪くないと思います。私はイタリアの本を読めるようになりたかっただけでした。



Hotel FRANZISKANER Tel. 051-340120  
 チュールッヒにいくと、ビデがなくなった。ナルホド。ここはラテン系ではないことがよくわかる。窓のガラスが二重になった。冬の寒さがキビシイことを窓がおしえてくれる。部屋を見わたして、その地方の風土をお国ぶりを感ずることに興味を持ち、オモシロがらてスケッチしながら旅をした。といっても、しょせん節穴からの覗き見ていどにすぎないが…。 新潮文庫

【河童が覗いたヨーロッパ 表紙】

出典元: <https://www.shinchosha.co.jp/book/131101/>

(元当館語学講師)

＜カンツォーネ講習会＞

講師: 山本隆子(ソプラノ歌手)  
 岩坂富美子(ピアノ伴奏)  
 日時: 第1回 2026年6月5日(金)  
 14時～16時  
 第2回 2026年6月12日(金)  
 14時～16時  
 場所: 日本イタリア会館 京都本校  
 参加費: 2回分一括 個人維持会員 4,000円  
 一般 5,000円  
 1回分 個人維持会委員 2,500円  
 一般 3,000円  
 定員: 30名先着順(最少遂行10名)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
 〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
 TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
 E-mail: centro@italiakaikan.jp  
 URL: <http://italiakaikan.jp/>